

わしら「古希リーガー」



オール寝屋川 妻谷選手(80)

近畿古希軟式野球リーグの公式戦で、バッターボックスに向かう妻谷彰さん(左)。送り出すのは、1歳年下で監督＝寝屋川市明和1丁目



下

さん(80)が第2打席で痛烈なレフトライナーを放つと、ベンチから喝采があがる。70歳のルーキーが走塁ミスをする。「若気の至りかい」とヤジが飛んだ。

オール寝屋川は、昨年55チームが参加した第22回全日本古希軟式野球大会で、準優勝した強豪だ。エース(72)は、10年前から心臓にペースメーカーをつけているが、全国大会では6試合中5試合を完投。75歳の投手は57年間、草野球で登板し続け、通算500勝はしているという。阪下さん

「まだまだいけまんがな」
5月29日午前、寝屋川市内のグラウンドで選手たちの声が響く。近畿古希軟式野球リーグのオール寝屋川対なにわフェニックス戦。両チームのメンバー約30人は、今年70歳以上になる「古希リーガー」だ。

寝屋川の最年長、妻谷彰谷さんは、「昔は60歳だったチームの代表も務める妻谷さんは、昔は60歳だった

妻谷さんは大阪市生野区(当時は東成区)出身。野球好きの父親の影響で幼い頃から野球に親しんだ。戦時中だった小学生の時、「野球は敵国のスポーツ」と非難されても、こっそりキャッチボールをした。終戦翌年には、生野工業学校(現・生野工業高校)の野球部創設メンバーになっ

「まだまだいけまんがな」

た。ヤミ市で軍足(軍用靴下)を買い、色を染めてストッキングにした。授業中に机の下で隠れて、皮のめくれたボールを縫い直した。「どこにかく野球が楽しいってしゃあなかった。娯楽がなかったから、強烈にありがたみを感じてやっと思った」
学制改革で工業高校になって3年目、最後の夏。優勝候補の大鉄(現・阪南大高)と1回戦を戦い、エースとして延長14回を投げ抜いたが、0-3で敗れた。「悔しかったけど、一番の思い出やな」
卒業後、父親の鉄工所に勤めてからも野球一筋。会社の準硬式チームでプレーした。40代で少年野球の監督になり、母校の野球部OB会長も長く務めた。
少年野球の監督を65歳でやめて、3年ほど写真や釣りを楽しむ。そんな折、公園の池で釣りをしているとき、クラブとバットを持って遊ぶ老人たちをみかけた。「おっさんら、ほんまに下手やった。キャッチボールの相手したら、「大将、うまいんやな」って

妻谷さんは3年前、心臓のバイパス手術を受けた。妻の徳子さん(74)は「野球のために手術したんですよ。お医者さんは普通に暮らすなら必要ないって言ったのに」と苦笑する。

なせ、そこまでして野球を続けるのか。「楽しいからや。その辺は、子どものころと同じやな」。野球のおかげで大阪だけでなく、全国に仲間ができた。死ぬまで現役を貫くつもりだ。「この年で野球やってる言ったらみなフワッってびっくりしますけど。あんな、やってみたら、こんなに下手やった。キャッチボールの相手したら、「大将、うまいんやな」って

(この連載は宮崎亮が担当しました)

お二人とも、冠動脈バイパス手術を受け、まだまだ元気に現役の中心選手としてご活躍です。